

---

# ある天幕内の惨劇

Rail

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある天幕内での惨劇

### 【Zマーク】

N76250

### 【作者名】

Rail

### 【あらすじ】

ある戦争の最中、屍の山の中から出てきた女が見つかった。敵の手のものかと女を捕まえ取り調べる男たちだったが、それは血まみれの惨劇の幕開けだった。

## (前書き)

暴力表現及び最後は血の惨劇となりますので、苦手な人はご注意ください。コメディ成分はありません。

長きに渡る戦争があった。

一つの国には古くから確執があり、僅かな領土をめぐつての争いをきっかけに、その後三十年に渡つて戦争が繰り広げられた。民は疲弊し、国土は荒れた。

そんな中、再び両国が刃を交えた。

一人の目の前には死屍累々の平原が広がっていた。折り重なった死体の血は赤黒く染まり、死の臭いが辺りに立ち込めていた。

「派手に負けたな」

屍の所属を確認しながらヴォルトが言つ。

「どつこいどつこいさ。最後の総力戦だしな」隣りに立つワッツは肩をすくめた。

「何度も最後だ?」

ヴォルトは皮肉っぽく言つと、少しばかり離れたところから上がる野営地の煙を見てため息をついた。

ヴォルトの所属する国も敵国も、今回の戦いで多大なる被害を出していた。

最後の戦い、そう言つて今まで何度も同じような戦いを繰り広げただろうか。

和平の交渉はことじとく決裂したこともあり、両国の溝は深まるばかりだった。

ふと死体の山を見ていたワッソが目つきを鋭くした。

「おい、動いてるやつがいるぞ」

その言葉でヴォルトはワッツの視線の先に目を凝らした。確かに、動いている人間がいる。自軍の人間ではない。それを視認した途端、一人は走り出していた。

「何者だ」

鋭い誰何とともに、ヴォルトはその人間に剣をつきつけた。

「ええと…………怪しいものじゃござれこませんが」

そこにいたのは若い女だった。死体の下から這い出てきている最中のように、未だ足は死体に埋もれている。髪がずいぶんと短い女だった。珍妙な衣服は血と泥で汚れていたが傷はない。明らかにこの戦場跡ではおかしかった。

「連れて行こう」

「ああ」

ヴォルトの短い声にワッソが答える。まだ状況が呑み込めていない様子の女を無理やり引き起こすと、無理やり歩かせて自陣の野営地へと向かった。

天幕での尋問に、女は思いのほか素直に答えた。

しかし内容は正気の沙汰とは思えないもので、からかっているのかと途中でワッツが激昂したほどだ。

女は異世界から来たという。

戦争のないところで、パン屋で働いていたという。

あの場には気付いたらいたと言い、聞者ではないと主張する。

女の手は貴族階級かと思うほど綺麗な手をしていた。少なくとも、武術はたしなんでいないだろ？

しかしそれでも聞者でないという保証はどうにもない。

ヴォルトは今回の戦の指揮者である王子のリカルドに判断を仰いだ。

女のいる天幕を訪れたリカルドは鋭い視線で女を上から下まで検分した。

「女。何者だ」

「単なる巻き込まれた一般市民です。あの、私は一体どうなるんでしょう？」

先ほどの尋問の時といい、女はやけに落ち着いていた。そこがヴォルト達が女を一般人と判断しない材料でもあつた。

「ふん……我々に害をなすものなら消す。それだけだ」

リカルドが横柄に言つと、女は困ったような顔をした。

「参りましたねえ。特にこれといって害をなすつもりはないんです

が

「口だけならば何とでも言える」

冷たい声でリカルドが言こさる。  
長きに渡る戦争で、国は荒れた。裏切り者も後を絶たない。ならばいつそ疑わしきは殺してしまえばいい。リカルドは今までそうやつてきた。

「それもそうですねえ。でも害をなさないものだつたらどうするんですか？ 出来ればほつといてくれたら一番なんですが」

暢気な女の声に、ふとリカルドは目を細めた。

「使える限り使うだけだ。といつても、どこの人間とも知れぬ人間を信頼するほどどうちは甘くないがな。女だろうが、子供だろうが。まあ女ならば敵だろうと使えるがな」

喉の奥で笑つたりカルドを見て、女はキヨトンとした顔をしていた。てつきりリカルドの言葉の意味が分かつていないのでどうと男三人は思つていたのだが、

「わ、戦争中の兵士つて略奪とか強姦とか普通にするつて聞いたことがありますけど本当なんですね、つていうか上司公認の輪姦？ 男社会つてそういうとこありますよね、なんか悪いことをみんなでやつて仲間の絆とかいうの。しかもトップ公認ならやり放題ですね、しかももみ消しも余裕、身元不詳ならさんざ遊んだ拳銃殺して死体その辺に放置しても文句言つてくる人間もいませんもんね、やっぱりこういう戦の最中つてそういうこと結構やつてるんですか？」

女は目を輝かせながら滔々とまくしたてた。

「そういうのって生存本能のせいでもあるらしいですね、生命の危機に陥ると男性は自分の子孫を残そうと性欲が高まるらしいですよ。逆に女性はそうでもないんですって、何しろ母体が危険な状態なら子供がいようと関係ありませんからね、実際どうですかあなた方は平時なら女性にさぞやモテそうな顔ですがやっぱり戦の最中は性欲が強くなりますか？ もしかしてセツキの死体の山はその被害者ですか？」

先ほどまで言葉少なな様子だった女の変貌に男達はどこかつすら寒いものを覚えた。

「黙れ」

リカルドが女の首筋に剣を当て高圧的に言い放った。今までの間諜も捕虜も、こうすれば青ざめた顔で大人しくなったからだ。しかし女の表情は変わらない。

「ああやだやだ、この國の人たちは見た目はお上品でも中身は山賊みたいですね、まあだからこそ女を慰み者にしようなんて考えがあるんでしょうけど、それにしても何かあれば剣をつきつけて自分の要求を通そうとするなんて」

「黙れ！」

リカルドは刃を女の首筋に滑らせはしなかった。  
代わりに女を全力で蹴り飛ばした。

所詮女だ。多少殴れば静かになるだろうとリカルドは思ったのだ。

華奢な体が天幕の中を転がった。

その場にいた男達は誰も女が氣の毒だとは思わなかつた。むしろワツツなどは当然だと思つたくらいだ。正体も分からぬ女が、自分たちを指揮する王子に無礼な言動をしたのだから。その減らず口がしばらく叩けなくなればいいとすら思つていた。

が、

「ひどいですねえ、無抵抗な女の子をためらいもなく蹴りますか、ああほら歯が抜けちゃつたじゃないですか、永久歯つてもう生えてこないんですよなんてことしてくれんですか」

女はわざとらしく顔をしかめながら起き上つた。

まるでちょっと蚊に刺されたとでもいう風に口から血まみれの歯を吐きだすのは異様だ。

この瞬間、天幕の中にいた三人は女が一般人であるという認識を完全に捨てた。

「黙れ。お前は何者だ！？」

リカルドが声を荒げる。

しかし女はやれやれといった風に肩をすくめた。

「だから異世界から来た一般人だと言つてゐるじゃないですか、あなた方に理不尽な扱いをされてゐる、ね。まったくもつて紳士的ではないですね、戦時だからですか？ それとも元々ですか？ 私の生まれた世界には歴史上の名言で『平家にあらずんば人にあらず』というのがあります、権勢を誇る自分たち以外を見下していた人たちがいたんですが、あなた方もその手合いなんでしょうかね、結局のところ女の腹から生まれてくるところは皆同じなのに」

「貴様とリカルド様を同じと言つか！」

ワツツが激昂する。ヴォルトの制止するより早く、ワツツは女の顔を殴りつけた。

再び女が天幕の中を転がる。

鍛えられたワツツの拳を食らえば、普通の女子供なら間違いなく気絶、もしくは起き上がれなくなるだろう。

だが、相手が普通でないならば？

緊張した空氣で女を観察していると、女はゆっくりと起き上がった。床についた腕は震えている。殴られた顔は早くも青黒くなっていた。

起き上がっているだけでギリギリのように見えるが、女の口調だけは相変わらずよどみなく滑らかに言葉が紡がれていく。それは緊迫した空氣にはあまりにもそぐわないものだった。

「同じではありませんね、性別も違えば遺伝子も違うでしょうし何より性格が違います、ですが人間ということでは同じですよ、まああなた方は認めたくはないでしょうけれども。他の人間より優れていると思つてているでしようから、私のような人間と一緒にされることは耐え難いのでしょうか？」

「分かっているのなら口に出さないことだな」

ヴォルトが硬い声で言つ。

女は首を振つた。

「言論の自由がないのですか、ああ空氣を読めということですね、ですがそれはできません。今の空氣は私が罪人だか間諜だかでそちらにとつて見過ごせない人物なのでどうにかこうにか始末しておこうという空氣ですからね、私だって最初からこうだったわけじゃありませんよ、昔は大人しくしてました、でもそうするとそちらの思

い込みのせいで死ぬような目にあわされますからね、さすがに学習しましたよ」

「昔は、ところのばびつこひじだ」

リカルドの目がギラリと光る。

彼女の言葉から察するに、女は過去に似たような状況に遭遇している。

リカルドの変化を気にも留めず、女は再び語りだす。

「私はどうにもこつにも奇妙な体質でしてね、異世界トリップというのを今まで何度も経験しているんですよ、あ、トリップというのは旅行という意味なんですが、自発的に異世界に行こうとしたわけではなく、気付けば異世界にいるという状況なんですがね、それで飛ぶ先は決まっていないくて、平和なとこ物騒なとこ無人のとこと色々あるわけです、ああ、先ほどは旅行と言いましたが違いますね、異世界に渡ってしまうと元の世界には戻れないんですよ、死んでもね、ええ」

語るにつれ、女の瞳は爛爛と輝く。熱に浮かされたようなその顔は、それを見る三人をぞっとさせた。

今まで命乞いのために嘆願する人間を見てきたが、そのどれもが目の前の少女ほどの異常性を示さなかつた。リカルド達も嫌悪以外の感情を示したことはなかつた。

しかし今日の前で滔々と語る女の姿はあまりにも異常で、嫌悪感よりも恐怖心を煽るものだつた。

「あなた方のような傍若無人な方にはたくさんお会いしましたよ、なぜか皆さん決まって私を怖がれます、善良な方々は私を怖がつたりはしないんですけどね。今のあなた方も私を怖がっている、そうして今にも殺そくどうか迷つていてるんでしょう？ ですがそ

れは止めた方がいいですよ、必ず後悔なさいます、あなた方にできる最良の一手は私をその辺の森に捨ててくることです、悪いことは言いません、私のことは捨て置いてください」

リカルドは一国の王子である。今回の戦争で指揮を任せられる程度には優秀であり、当然それにふさわしい矜持もあった。

しかし田の前の女の薄気味悪さはそんな彼を怖がらせる何かを持っていた。女の言つことはまさに正鵠を射ていた。

だからこそリカルドはかつとなつた。女に対して抱く恐怖が過剰なまでの攻撃を促す。常の彼らしくない暴力的な選択肢が浮かび、彼はそれを口にした。

「ワツツ、殺せ」

言下に女がため息をついた。

「止めて置いた方があなた方のためですよ」

そのいかにもうんざりした口調に、ワツツの額に青筋が浮かんだ。リカルドの命令に忠実なワツツは、腰に佩いた剣で女の首を切り落とした。

何かを言おうと口を開いていた女だが、その首が「」と地面上に落ちる。ころりと転がった首は、今まで彼らが落としてきた首と同じくすぐに動きを止めた。

そのことに内心でほっとしたリカルドは女の首を不愉快そうにかかとで踏みつけ、すぐに胴体の方へと蹴り飛ばした。天幕の中は血の臭いが充満している。

「ワツツ、この『マミ』を森にでも捨ててこい」

リカルドが命じると、それまでぼんやりと女の死体を見下ろしていたワッツが顔を上げた。

「ひどい扱いですね、確かに人が死ねば单なるたんぱく質の固まりでしょ？が、もうちよつと死人を弔うという感覚はないんですか、ああやつぱり青い血が流れてない一般庶民はあなた方にとつては生きていると認識されることもないというわけですか？」

「おい、ワッツ！？」

ヴォルトが目を瞠つた。

先ほどまで女を憎々しげに睨みつけていたワッツがまるで先ほど死んだ女のような口調で喋つたという事態が理解できなかつた。

先ほどまでワッツだつた人物は気の抜けたような顔で笑う。しかし目だけは異様な光を帯びており、先ほど死んだ少女を彷彿とさせた。

「ワッツ、ふざけるな」

リカルドが低い声で言つ。しかしワッツは困り顔で頭をかいた。

「いえ、これっぽっちもふざけてなんかいませんよ、私はいつも真面目です、止めた方がいい言つたじゃありませんか、理由を言つ時間も与えてくれなかつたのはそちらでしょう」

リカルドたちは目の前の男から距離を取つた。

今まで苦楽を共にした仲間だつたはずの男は、今や氣味が悪い人物にとつて代わつていた。

「人を殺すにはそれなりのリスクというものがあるんですよ、無抵

抗でか弱い女の子を殺すんなら何かしら良心がとがめるなりなんなりしてもおかしくないんですが、あなた方表情一つ変えませんでし  
たね、さすがは人でなしというところでしょうか

「黙れ、黙れ黙れ黙れえ！」

耐えきれなくなつたりカルドがワツツに斬りかかる。

戦場で出会えば死を意味すると言われたほどの剣士だつたワツツ  
は、リカルドの剣に反応することすらしなかつた。否、できなかつ  
たのだろう。中身が違つてているのだから。

真つ赤な血しぶきが天幕の中に飛び散る。

「ひどいですね、また死んじゃうじゃないですか」

血潮で赤く染まつたワツツが眉をしかめた。  
それに止めを刺したのは、ワツツの長らくの友でもあつたヴォル  
トだった。

ワツツの動きは徐々に緩慢になり、やがて止まつた。

信じがたい出来事に動搖したりカルドは、真つ赤に染まつた天幕  
の中でめまいを感じた。今まで戦場で数えきれないほどの人間を手  
に掛けてきたが、自分の腹心の部下を殺したのは初めてだった。先  
ほどの女を殺した時とは違い、後悔とやりきれなさが胸に迫つてく  
る。

親友であり己の右腕を亡くしたヴォルトも同様だろうと思い、リ  
カルドはヴォルトの顔を見た。

が、予想とは裏腹に、ヴォルトは呆れた顔をしていた。

「本当に野蛮ですね、仲間すら手に掛けますか、あなたには情とい

うものがないんですか？　ああ、もしかして恐怖にかられてということでしょうか、なぜか私と話をする恐怖にかられて発狂する人が少くないんですよね」

よどみなく語られ、リカルドは全身から血の気が引いた。  
その口調はまぎれもなく、先ほど死んだ少女とその後のワッツと同じものだった。

「な、ぜ……」

リカルドは自分の喉がからからに乾いているのを感じた。喉が張り付いたように声が上手く出ない。

ワッツの返り血を浴びたヴォルトは眉を落として肩をすくめた。

「因果な体質なんですよ私はね、異世界トリップするには条件があるんですね、私がその世界で死ななければならぬんです、でも死んだときによく近くにいる人に乗り移つてしまふんですよ、ほとんどの場合私を殺した人になるんですけど。乗り移らなければ他の世界に行くんです、なぜかその時はデフォルトの体に戻つてしまふんですよ、最初にトリップした十八のころの姿たちに」

リカルドと共に戦つてきたヴォルトはどこにもいなかつた。いるのはただ、生者の体を乗つ取り薄気味悪い事を喋り続ける亡者だ。

「デフォルトの体もそなんですけど、乗り移つた体も痛覚がマヒしてしまっているみたいで痛みを感じないようになつてているんですね、だから死んでもさほど痛くないので助かるといえば助かるのですが。もう何回死んだのか殺されたのか覚えていませんよ、死ぬと心が痛いんです、まあ飼い殺しにされるのも辛いものがあるん

ですけど」

今やリカルドはヴォルトを直視することができなかつた。歯の根が合わず、全身がふるえている。

不死身と呼ばれた相手と戦つたこともある。自分よりもはるかに強い相手とまみえたことも。

けれども「これほどまでに恐怖心と生理的嫌悪を覚えたことはついたがつた。

殺しても殺しても甦つてくる相手など、ましてや殺した相手を乗つ取る相手など。

気付けばリカルドはヴォルトの胸に剣を突き立てていた。

「消える」

剣を引き抜き、再び突き刺す。

「消える」

剣を引き、真一文字に斬り裂く。

「消えるー！」

何度も何度もリカルドは剣をふるつた。

血しぶきと肉塊が辺りに飛び散る。

むせかえるような血の臭いの中、リカルドは狂つたかのようにヴォルトを切り刻んだ。

やがて原型すら留めなくなつたヴォルトの死体の前に、リカルド

は膝をついた。その傍らにはワッソの死体も転がっている。せりて女の死体も。

天幕の中はさながら地獄の様相を呈していた。

「は、ははっ……」

リカルドは血まみれの自分自身を見下ろして笑う。

「ははは、はは！」

タガが外れたようにリカルドは笑いだした。その双眸からは涙がこぼれている。

「やつた、消えた、化け物は消えた！」

そう叫ぶと、リカルドの体からふつと力が抜けた。  
血の海に膝をつく。

しばらくその状態で固まっていたリカルドだったが、やがてすつと立ち上がった。

そして周囲の惨状を見てやれやれとため息をつく。

「殺さない方がいい理由まで教えたのに、人の話を聞かない人でしたねえ」

そして腕を組んでぶつぶつと呟いた。

「トップの人人が部下を惨殺、しかも今は戦争中、どう考へても面倒くさいことにしかなりませんね」

そう言つと、リカルドだつた人物は落ちてゐる剣を拾い上げた。

「……はひとつ、逃げましようか」

直後にざくりと音がした。

そうして天幕の中にいた最後の一人が死んだのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7625o/>

---

ある天幕内での惨劇

2010年11月17日02時54分発行